



昭和十五年

二月

わが子の幸福

倉橋惣三

わが子の幸福を願はない親はありません。そのためには、どんな工夫をしてでもと思ひます。ところが、どういふことが、ほんとうの幸福なのであらうかといふことは、間違ひがないとも言へません。何を與へても喜ぶのが子どもです。出来るだけほんとうの幸福を與へたいものです。ほんとうの幸福は、今楽しいと共に後のためになることでなければなりません。又、おとなの幸福と子どもの幸福とは同じではありません。そこで、幼い時は

充分幼い子どもらしくさせて貰ふことが、一番の幸福といふことになりませう。幼稚園で友達と遊んでゐる我子を御覧なさい。眞の子どもの世界で、一ぱいに子どもらしさを樂しんでゐます。この幸福が後のためにならないことがありませうか。生きてゐるものゝ幸福は、ほんとうに生きることです。そして、子どもは心のありたけ力のかぎり遊んでゐる時こそ、ほんとうに生きてゐるのです。これが一番の幸福でないといひ得ませう。

想像の強い子

久米京子

父親タイプライターを打つて居る。幼稚園一年の妹、周圍をビヨソソと跳びはね乍らタイプライターと題して即興詩を歌ふ。「ダン／＼の様にはねかして、チンと鳴つてもうお終ひ。」×××庭で折角採つて TENTOU 蟲に逃げられた或る朝、登園の途中道端で一匹の TENTOU 蟲を發見して「あ!! 今朝のお蟲だ。矢張り南が好きだからついて來たんだ。」×××數ヶ月を終たある日食後の團欒、母親「富士山の上にはね、夏でも雪があるのよ」小學一年の兄「フーン」妹傍から「さう!! 私赤ちやんの時、ママのボン／＼の中でその雪見た。」一同洪笑。こうまで自在な彼女の空想には一同あきれて顔見合はずばかり。子供の想像の奔放さは、どこまで發展させていゝものでせうかと、これも顔を見合せて。